
星屑のステージ

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

星屑のステージ

【Nコード】

N7765C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ようやくスターになれた。だがそれを一番最初に祝って欲しかった人はもういない。空っぽのシートを見てそれでも唄う。チェッカーズシリーズ第二十二弾、初期シングルの曲です。

第一章

星屑のステージ

「どうしてこんなことになっちまったのか。俺にはわからなかった。」

「なあ」

「仲間達が俺に声をかけてくれる。だがそれに何も言えなかった。」

「気を落とすなよ」

「気持ちはわかるからよ」

「ああ」

「俺はそれに頷く。けれどそれに返すことは完全には無理だった。」

「じゃあ行くか」

「時間だぜ」

「わかってるさ」

「それにまた頷く。もう皆ステージ衣装を着ている。俺もそれは同じだ。」

「なあ」

「リーダーが俺に声をかけてきた。」

「今日のステージな」

「今日のか」

「あの娘の為に歌えよ」

「いいのか、それで」

「俺は声だけでリーダーに問い返した。」

「ファンの為じゃなくてうお。いつも御前が言ってるみたいにじゃなくて」

「今日はいいさ」

「だがリーダーはそれを許してくれた。」

「その分は俺がやるから」

「そうか」

「ああ、任せろ」

「俺もだ」

「俺も」

他の仲間達もそれに続いてくれた。

「ファンには俺達が音楽を聴かせる。だから御前は」

「今日だけは。あの娘の為にな」

「済まない」

「いや、いいさ」

リーダーだけじゃなかった。皆こう言ってくれた。それも俺には

凄く嬉しかった。

「今日だけはな」

「ああ、あの娘の為に。歌えよ」

「わかった。それじゃあ」

俺はそれに応えて頷いた。

ステージに向かう。あの娘の為に。

第二章

俺とあの娘が会ったのは何時だったか。高校の時だったのは覚えていない。

その時はまだ俺はアマチュアだった。ステージのある店でいつも歌っていた。

先輩達が高校を卒業して仲間がいなくなって寂しい時にリーダーが声をかけてくれた。一緒にバンドをやらないかと。

丁度そいつも先輩達が卒業して仲間がいなかった。それで俺に声をかけてきたってわけだ。

「ああ、いいぜ」

俺はそれに応えた。そして弟と同じ学校の後輩と幼馴染みも誘った。ついでに俺達みたいに一人になつていた奴を一人と他のバンドからもう一人声をかけてた。これで七人になつてはじめた。

俺達は自分で言うのも何だが人気があった。街じゃ忽ち一番になった。ステージが楽しくて仕方がなかった。そんな時に彼女と出会ったのを覚えている。

「あの」

彼女の方から俺におずおずと声をかけてきた。丁度店を出たところだ。

「あん!？」

俺はその声に顔を向けた。そこにいたのはやけに背の小さいあの娘だった。

「何、あんた」

俺は彼女に声をかけた。

「サインや贈り物ならノープロブレムだぜ」

「そうそう、できれば食べ物がいいな」

ヴォーカルをやっている幼馴染みが後ろから言ってきた。高校生なのにもう髭を生やしていた。

「サンドイッチとかな」

「御前せこいな、おい」

それを聞いたリーダーが笑う。

「他のがいいだろうが」

「じゃあ何があるんだよ」

「フライドチキンとかよ」

「大して変わらねえじゃねえか」

これは俺も同じことを思った。

「せこいな、おい」

「悪いかよ、フライドチキンで」

「まあいいけれどな。それでどうしたの、君」

「はい」

また俺に顔を向けてきた。

「お渡ししたいものがあった」

「プレゼント!？」

「あの、それは」

「何なんだよ、一体」

何か話を読めなくなっていた。贈り物らしいので悪い気はしなかったが。

「これです」

彼女はそう言うと俺の前にそれを出してきた。

「これは」

「お願いします。受け取って下さい」

「あ、ああ」

戸惑いながらもそれに答えた。

「それじゃあ」

「はい。それで」

「それで?」

「また後で」

そこまで言うと慌てて俺の前から姿を消した。何か最後まで話が

読めなかった。

「何なんだろ」

「意外と不幸の手紙だったりしてな」

その一人になつてたところを誘つた奴、今はベースやつてるのが俺に声をかけてきた。

「怖いぜ、それ」

「そんなのだつたら別に驚かねえよ」

不幸の手紙なんて信じちゃいない。そんなので不幸になつてたら命が幾つあつても足りないからだ。

「まあ後でな」

俺は言つた。

「後で開けてみるよ。それじゃあな」

「ああ」

「どっかで打ち上げするか」

「そうだな。何処行くよ」

「俺の家なんてどうだ」

俺はここで言つた。

「酒もあるしよ。一杯やりながら」

「ああいいな」

「それじゃあ御前の家でな」

「よし。おい」

弟に声をかけた。

「ありつたけ出すぞ。いいな」

「この前飲んだばかりでかよ」

「構わねえよ。あつても親父が飲むか俺達が飲むかだろ」

「まあね」

俺も弟も親父も大酒飲みだ。どうもそういう家系らしい。煙草は小学生でやつたし酒も中学生からやってた。そのせいか俺の背は伸びなかった。今じゃ弟より小さい。チビだとは言われ慣れている。「それじゃあそこでな」

「よし、明日は休みだしな」

だからだった。とことんまで飲むのは。

「とことんまで飲むか」

「じゃあ行くこうぜ」

「よし」

「つまみは銘々で買って来いよ」

「店開いてねえぞ、おい」

この時代コンビニなんてものはなかった。

「じゃあどうするよ」

「俺一旦家に戻るよ」

後輩でヴォーカルやっているのがこう言ってきた。

「それで何か探してくるから」

「よし、じゃあ先行け」

「何でもいいから持って来い。いいな」

「わかったよ。それじゃあ」

「ああ」

これでつまみも確保した。そして俺達はその日は朝まで七人でしこたま飲んだ。

朝になった。俺は酔い潰れた面々の中で昨日あの娘からもらった手紙を開いた。

「何なんだろうな」

読んでみると何か妙な感じだった。

「!？」

書いてある内容が何か見慣れたものじゃなかったのだ。それは。何とラブレターだった。貰ったのははじめてだった。

第三章

「おい、これ」

「あん！？どうした！？」

俺の声に皆起き上がった。どいつもこいつも俺も含めて酒臭い。

「昨日の手紙だけねどな」

「ああ」

「えらいものだぞ、これ」

「どうしたよ」

「やっぱり不幸の手紙か？」

「だから何でそうなるんだよ」

俺はベースの言葉に少しムキになった。

「違うよ」

「じゃあ何なんだよ」

「そうよ。かえって気になるぜ。言ってくれよ」

「ラブレターだよ」

「っておい」

皆それを聞いて一発で態度を変えてきた。

「それかよ」

「またえらく凄いものもらったな」

「ああ、それでな」

俺は皆に対して言う。

「付き合っただけ欲しいって。電話番号まで書いてある」

「そこで返事して欲しいってことだな」

「多分な」

「それでどうするの？」

他のバンドから引き抜いてきたドラムが俺に尋ねる。そういえばこいつには仲間にならないと山に埋めるぞと脅したのを覚えている。

「いいの？駄目なの？」

「おい、待ってって」

何か急かしてきたのでそれを止めた。

「とりあえず俺今フリーなんだよ」

「ああ、御前別れたんだったな」

リーダーがそれに言及してきた。

「この前」

「ああ。だからな」

別に断る理由はなかった。

「とりあえず話だけでも聞いてみるさ」

「ああ、それがいい」

「そういうことだな。じゃあそれでな」

「決まりか」

「会っただけはな」

付き合うとはこの時は決めてはいなかった。

「会ってみるさ」

「わかったよ。じゃあ後で結果教えろよ」

「付き合うのかどうかな」

「楽しみにしてるぜ」

俺と同じ歳のリーダーと髭、ベースが俺に言ってきた。

「兄貴って何か女の子絶えることないね」

「それが人徳ってやつさ」

弟には笑ってそう返した。

「人徳、ねえ」

「何だよ」

後輩はジロリと睨んでやった。

「文句あるのかよ」

「いや、それは」

「じゃあ後でな、話すからよ」

「期待してるよ」

ドラムが声をかけてくれた。グループじゃ多分こいつが一番性格が優しい。けれど何処か損をするタイプなのでそれが心配だったりする。

「ああ、そういうことだな」

こうして数日後俺は彼女と会うことになった。場所はある喫茶店だった。

何か早く来ちゃった。白い店の中に何か西鉄ライオンズの旗とかがかけてあった。それを見るとガキの頃に戻った気がした。

「まだあったのかよ、こんなの」

西鉄の選手の写真もある。俺がガキの頃に身売りされて後は流転しちまった。遂には埼玉の方に行っちまった。それが何か寂しくて仕方がなかった。

「よくもまあ残してあるな」

写真を見ながら思った。それでテーブルに座った。暫くして彼女もやって来た。

「あ、あの」

おどおどした様子で俺に声をかけてきた。何か目一杯無理をしてお洒落をしてきたって感じだった。髪型も聖子ちゃんみたいな感じに変えてきていた。どうやらマジらしい。

「まあ座ろっよ」

俺はそんな彼女に優しい声をかけた。

「それで話しようよ」

「は、はい」

何か大人のエスコートだった。自分でもよくこんなのができたと思っただ。

「まずはこんにちは」

「はい、こんにちは」

あらためて挨拶をした。

「それですね」

彼女はおどおどして顔を俯けさせたまま言葉を出してきた。

「お手紙ですけど」

「読んだよ」

俺は答えた。

「そうなんですか」

「うん」

にこやかな声で答えたつもりだ。けれど彼女はまだ戸惑っていた。

「それじゃあ」

戸惑いながら言葉を出す。

「あの、どうなんでしょうか。その」

「いいよ」

俺は自然にこう言った。

「えっ」

彼女はその言葉が信じられないようであった。ぱっと顔を上げてきた。

第四章

「あの、今」

「だからいいよ」

俺はまた言った。

「付き合つかどうかだよ。俺今フリーだし」

「いいんですか」

「俺と付き合いたいから手紙くれたんだよね」

「はい」

顔を真っ赤にして答える。

「そうですね」

「じゃあさ、それでいいよ」

俺はまた言った。

「俺もさ、まさかあんな手紙自分が貰えるとは思えなかったし」

「はあ」

「俺でいいよね、本当に」

「はい」

その言葉にこくりと頷いてくれた。そのことは俺は今でもはっきりと覚えている。

「お願いします」

「うん、俺もお願いするよ」

俺はまた優しい声で言った。

「宜しくね、これから」

「私も」

こうして俺達の交際がはじまった。バンドの方は高校を卒業してからもやっついてこっちはトントントン拍子な感じだった。あつという間に東京でのデビューが決まった。

「それ本当!？」

「ああ、本当さ」

はじめて会ったその喫茶店で俺は彼女に話した。

「東京行きが決まったよ」

「そうなの、遂に」

「三曲だな」

俺は強い声で言った。

「三曲売って駄目だったらこっちに変えるつもりだ」

「勝負なのね」

「ああ、絶対にやるぜ」

俺はその三曲で絶対にメジャーになる自信があった。なけりゃ今までやってきやしない。

「だからな。待っててくれよ」

俺は彼女に囁いた。

「武道館でのコンサートは御前も呼ぶからさ」

「絶対よ」

彼女は嬉しさのせいか泣いていた。俺の幸せに泣いてくれていた。絶対に呼んでね」

それだけじゃなかったかも知れない。俺のコンサートを東京で見られることを心から喜んでくれていたのかも。今はそう思えたりもする。

「ああ、絶対にだ」

俺は約束した。

「何があってもな」

「うん」

こう約束して俺は東京に旅立った。仲間達と一緒に。最後に俺を送ってくれた彼女の口笛は汽笛みたいだったのを覚えている。その汽笛を聴きながら東京に旅立った。

東京に出て暫くは苦労した。けれどここでも凄い調子で有名になってその武道館でコンサートを開くことになった。それが決まってすぐに彼女に電話した。

「えっ、もうなの」

電話の向こうから俺の歌が聴こえてくる。レコードで聴いてるのがわかる。

「ああ、決まったよ」

俺は明るい声で答えた。

「武道館な」

「凄いじゃない」

「ああ、それでな」

俺はここで言った。

「約束、覚えてるよな」

「ええ」

彼女の返事も明るかった。

「呼んでくれるのよね」

「ああ、それでな」

俺はまた話を出した。

「東京に来るだろ」

「うん」

俺のこの言葉にこくりと頷いてくれた。あの時は本当に嬉しかった。

「そうか。じゃあさ」

俺はさらに言った。

「俺さ、マンション借りたんだ」

「マンション?」

「そうさ。東京に出たらそこに来いよ」

一緒に住むことを言ってみた。

「いいか?」

「わかったわ」

彼女は俺のその申し出を受け入れてくれた。

「いいのよね、それで」

「ああ、俺からも頼むよ」

「じゃあ」

嬉し涙を流してくれた。それがまるで流れ星みたいに綺麗だったのを覚えている。俺はこの時天に昇るような気持ちだった。けれど、それは夢でしかなかった。彼女が死んだのだ。

「おい、嘘だろ」

俺は実家からマンションにかかってきた電話を聞いてまずは信じなかった。

「冗談だろ、お袋」

「嘘でこんなこと言うかい？」

「いや、それはよ」

そんなこと言う馬鹿はいない。だから信じるしかなかった。

「交通事故でね」

「事故って」

「トラックにはねられて。駄目だったよ」

「そうだったのかよ」

「ずっとあんなのこと言ってたよ」

お袋はそれも教えてくれた。

「あんなのコンサートに行きたいって。けれど」

「……………そうなのかよ」

「ああ。それでさ」

お袋はさらに言った。

「あんにコンサートと東京でのこともさ」

「どう言ってたんだい？あいつ」

「頑張ってたさ」

「頑張れ、か」

「そつだよ。今まで連絡取れなかったんだけれどどうしたんだい？」

「大阪の方に行ってたんだよ」

俺はそう説明した。

第五章

「仕事でな」

「そうだったのかい」

「今日帰ってきたばっかりだったんだよ」

「済まないね。疲れてるのに」

お袋は俺に申し訳なさそうに言ってきた。その優しさまで痛かった。

「いや、いいよ。そうなのか」

「そうだよ。お葬式も終わったよ」

「何もかもがだよ」

何かそこまで聞いて急に身体力が抜けてしまった。

「あいつが」

「コンサート頑張りなよ」

お袋は俺を励ますように声を送ってくれた。

「あの娘も言ってるんだしね」

「ああ、わかってるよ」

俺はその言葉に頷いた。

「じゃあ今度武道館だからよ」

「はじめてだったね。あそこは」

「そうさ。気合入れてくよ」

「踏ん張りなよ。武道館でなんてそうそうできやしないからね」

本当に。今の俺にとっては最高のお袋だった。ずっと最低のお袋だったのに。何でこんなことに気付かなかったのか。

「わかってるよ。じゃあな」

「ああ。たまには帰って来なよ」

「気が向いたらな」

これはいつもの決まり文句だった。それが終わってから俺はその場に崩れ落ちた。そして深い溜息と一緒に煙草を取り出した。

それに火を点ける。一服すると落ち着いた。

「嘘だろ……」

話を聞いても心の何処かでそう思った。

「あいつがかよ」

だが本当のことだった。そして武道館のコンサートの日になった。

俺は今ステージに向かおうとしている。

「今日はとことんまで歌うぜ」

俺はリーダーに対して言った。

「喉が涸れるまでな」

「あの娘の為か」

「ああ、あいつに届けてやるさ」

俺はこの時本気だった。

「あいつのところまでな。届くよな」

「届くんじゃないだろ」

後ろにいた髭が言ってきた。

「届かせるんだろ」

「そうか。そうだったよな」

それを言われてやっと気付いた。

「そうだったよな。届かせるんだ」

「そうだよ。今日は特別なんだからさ」

後輩も声をかけてくれた。

「頑張っていこう」

「わかったよ」

「それにこれが夢だったんだろう？御前の」

今度はベースが声をかけてきた。

「俺達の夢だったけれどよ。武道館で歌うのは」

「そうだったよな」

それも言われてやっと思い出す。本当に一つのことしか考えられなくなっていた。

「ここで歌うのがな」

「行こう、あの娘が待ってるよ」

ドラムがわざと明るい声で俺に声をかけてくれた。

「あんたの歌が聴きたいって」

「俺の歌か」

「兄貴の歌じゃなきゃ駄目なんだよ」

最後に弟が俺に言ってくれた。

「だからさ」

「よし」

これでもう俺は最後まで心が決まった。

「歌いに行く」

「ああ」

「じゃあな」

七人でステージに出た。黄色い歓声と光が俺達を包む。

席は満員だった。けれど一つだけ空いたシートがある。

俺はそのシートを見ていた。それ以外は何も見えてはいなかった。

「見てろよ」

俺はそのシートにいるあいつに声を送った。

「今日は御前の為に歌うよ。御前の為だけに」

演奏がはじまった。俺はマイクを握った。

そして歌った。あいつの為に。他の誰の為でもなくあいつの為だ

けに。その日の歌は全てあいつの為に歌った。何もかもを忘れて。

星屑のステージ 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7765c/>

星屑のステージ

2009年6月23日10時34分発行